

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スペイン語の関係節内の叙法選択の基準と意味について：

「特定性」と「主張」の概念と、関係節内の叙法選択を左右する諸要因

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Miyake, Haruko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1480">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1480</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## [博士論文審査の概要]

本論文は、スペイン語の関係節内の動詞の叙法形態が、どのような要因によって決定されるのかを考察するものである。この問題は従来、先行詞の「特定性 (specificity)」という概念によって説明されてきたが、本論文では、その説明では十分に説明できない現象があることを指摘し、それに代えて従属節についての話者の「主張 (assertion)」の有無という観点から捉えるべきであることを提唱する。また、「主張」の概念は「特定性」の上位概念であると見なす。その論拠は、電子コーパスから得られた事例と、それをもとに行なったインフォーマント調査に負っている。

叙法選択のしくみの研究は、名詞節、副詞節については数多くの発表があり、分析が進んでいるが、関係節についてはやや遅れている。それは関係節では叙法を導入する導入辞 (inductor) の同定が困難な場合が多いからである。学位申請者は修士課程入学時から、この困難な問題に的を絞り研究を進め、関係節においても、他の統語環境と同様に、話者の主張がある場合は直説法が用いられ、ない場合には接続法が選ばれるという結論に辿りついた。この提言は、接続法の機能についての一元論に属する強い仮説であり、きわめて明快ではあるが、それゆえの難点も多い。

本論文では、この点にはあまり立ち入らず、もっぱら特定性の概念をもってしては説明のつきにくい現象に焦点を当てて論考を進める。主として時事文の関係節で接続法 *ra* 形が直説法点過去・過去完了に相当する意味で使用されること、*único* (唯一の)、*primero* (最初の)、*último* (最後の) のように先行詞の内容を唯一的に限定する語が用いられる関係節に接続法が現れ得ること、の2点が主な論拠であるが、これだけをもって従来の学説を批判するのには、やや無理があると言わざるを得ない。特に *ra* は接続法の全時制でなく、過去形に限った、しかも文体的にも制限のある用法であるので、扱いにはより慎重な態度が求められる。

ただし、その過程で、上述のとおり、*único*, *primero*, *último*などを冠した先行詞にかかる関係節の叙法や、或いは疑惑の副詞 *quizá*, *quizás*, *probablemente*, *posiblemente* (いずれも「恐らく、多分」) を含む関係節の叙法など、従来あまり注目されなかった事象を取り上げて、精査している点は高く評価できる。

また、叙法交替によって生じる微妙な意味の違いについて、詳細なインフォーマント調査を行なっている。その結果報告は、この分野における有益なデータである。

## [論文審査結果]

本論文は6つの章から成る。第1章「はじめに」では、問題提起および術語

の規定を行なう。

第2章「不透明な文脈を導く主動詞と関係節の叙法選択について」では *buscar* (探す), *querer* (欲する) などの動詞の直接目的語にかかる関係節の中の叙法を論じ、「特定性」は「主張」の下位区分であるとの結論に至る。特定性の概念では説明できない事象の1つとして、接続法 *ra* 形の直説法点過去・過去完了的用法をあげている。その難点については、先に述べたとおりである。

第3章「先行詞に後続する関係節が現れる文の文脈と各叙法の表す意味分類について」では、収集文例とインフォーマント調査に基づいて、関係節で直説法・接続法が表す意味の微妙な違いを探り、非主張を「願望」「仮定」「後時」などに下位区分する。議論の運びにはやや難があるが、提出されたデータは非常に有益である。

第4章「最上級および *primero*, *último*, *único* のような最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語と、後続する関係節内の叙法選択について」では、特定性の高い先行詞に後続する関係節に接続法が現れる事例を扱い、この事例は特定性の概念を用いる説明にとっての反例となるので、主張の概念で説明すべきであると説く。また、従来、*primero*, *último*, *único* などを冠した先行詞には、最上級の先行詞句と同じ原理が働くとされてきたが、調査の結果、必ずしもそうでないことを明らかにしている。この報告は非常に意義のあるものである。

第5章「関係節における叙法決定と疑惑を表す副詞 *quizá(s)*, *probablemente*, *posiblemente* について」では、関係節の中に疑惑の副詞が用いられた場合、叙法の決定は関係節の規則で行われるのか、副詞が導入辞となるのかを論じる。2つの原則が衝突したとき、どちらが優先されるのかという興味深い現象に着目した点は、高く評価できる。ただし、この章は本論文の論旨と直接かかわっていないように受け取れるので、論の進め方に工夫が必要である。

第6章「結論」では、関係節の叙法選択に主張の概念が有効であることが再確認される。「主張」の他に「断定」「確信度」のような類似の術語が繰返し用いられ、理解を困難にしている点は、推敲が望まれる。

## **[最終試験結果]**

最終試験は、2013年2月5日、本学三木記念会館で実施され、福嶋教隆(主査, 司会進行), 宮本正美, Montserrat Sanz の3名の本学教員と、長谷川信弥 大阪大学准教授が審査にあたった。審査は公開で行なわれ、最初に学位申請者が論文要旨を述べた後に、各審査委員が論文に対する意見、感想、質問を述べ、申請者が回答するという形式で進められた。

審査員からは、上記の「論文審査結果」に記したさまざまな講評をはじめ、内容に詳しく踏み込んだ忌憚のない意見が数多く開陳された。「特定性」「主張」の概念の定義、その有無の識別の根拠、これらの概念は先行詞と関係節のいずれにかかわるものなのか、といった点について、また、叙法と関係節の制限用法・非制限用法との関係、nunca（決して）などの否定辞の有無による意味の差異、術語・説明の不備などについての質疑が交わされた。更に、現代の言語学では関係節の主部は先行詞に先立つ限定詞であるという見地が優勢なので、今後はその視点を積極的に採り入れるのが望ましいこと、議論にとって適切でない例文があがっているので差替えるべきことなどの助言がなされた。

学位申請者は、これらの質問に対して誠実に回答し、主張すべきところは適切に主張し、指摘された誤りや助言についてはこれを受け入れた。最後に会場の参加者からも質問、意見を得て、公開審査は終了した。

公開審査後、4名の審査委員は別室で協議を行なった。本論文は先行研究を十分に踏まえて、複雑な問題を丁寧に検討して、一定の結論に至ったこと、その過程で新しい指摘を行なったこと、有益なデータを多数提供していることが評価された。

そして、本論文が本学大学院博士課程文化交流専攻の博士（文学）の学位を授与するに十分な価値があることを審査員全員が認め、最終結果を「合格」とすることに決定した。